師匠と一夜

後日談　ハッピーバッドエブリデイ

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18903543

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, モブ霊, 芹霊, エク霊, 触手

ワンナイトしまくってる師匠が相談所のメンツにバレて泥沼化する話の後日談です。今回で本当に完結になります。（後はみーくんルートがあります）子供がしゃべります。エク霊、芹霊、モブ霊、モブ君に触手が生える触手プレイがあります。また、師匠の足が不自由になる描写、産卵を匂わせるような描写もあります。なお攻めの倫理観がアレとなっております。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

後日談　ハッピーバッドエブリデイ

「あっ♡あっ♡はうっん♡ああっ♡」
ギシギシとベッドが鳴る音が響く。
窓から差し込む光に照らされた霊幻のトロけ顔からは、トロトロと粘っこい涙が横に垂れていた。
「はぁっ……おい霊幻、こっち見ろ」
うつろな瞳がエクボを捉える。
「んっ……♡」
求められたままに、霊幻は口付けに応える。
ぐり、と奥に先端を押し込まれれば、もはやろくに動かなくなった霊幻の足が、かすかに持ち上がる。
「おく……っ♡、イっちゃう……っ♡」
「そろそろイけよ。締まりが良くなる」
「……っ、わかっ♡たぁ♡」
眉をひそめて挿送される肉壺の刺激に集中した霊幻は、ぴく、と腹を引き攣らせて、絶頂のとっかかりを捉えた。
「あ、あ、あ―――っ♡」
ぎゅうとエクボを抱きしめて、感じた痺れが身体で増幅されるのに霊幻は逆らわなかった。
「……っ、う」
眉を顰めてエクボは、びくんびくんと痙攣するナカに、ごしごしと敏感になっている肉棒を擦り付けるのに夢中になった。先端に感じるツンとした予兆を、裏筋が増幅する熱さとして性器に溜めていく。
「んっ♡んんっ♡はぁうっ♡」
絶頂に翻弄される身体をさらにほじくられて、更に大きな波に襲われそうになっている霊幻は、動きの鈍い下半身を引き摺るように腰をイヤイヤと揺らめかせる。
――その動きがエクボの劣情を煽るとも気が付かずに。
「もっとイジめて、ってか？」
「ちがっ♡んやあああ……っ♡」

エクボは動かない足をぐいと持ち上げて、きゅうきゅう締め付ける隘路をぐにゅりと割り開いてやる。
「ぁっ♡ぁあっ……♡」
白い喉を噛みついてとばかりに晒した霊幻は、深く自分の中に充満する、甘い毒ガスのような快感がはじけていくのに抵抗する術なく流されていた。
「っ、出すぞ……っ」
隘路の締め付けにじんと尾てい骨まで痺れさせられて、ぐぐっと睾丸を持ち上げる射精感に逆らわずに、エクボは霊幻のナカに精を放つ。凝り固まった熱を放出する感覚と共に、じんわりとした痺れが性器から腰まで上がってくる。
一瞬で過ぎ去るソレに、エクボは一時の満足を得た。
「エクボ、好き……♡」
胡乱に微笑んだまま頬擦りしてくる霊幻にエクボは嫌悪感を覚えるが、顔はついゆるんでしまう。
「すっかりお人形さんに成り下がりやがって」
「……」
うっそりと微笑んだままの霊幻は答えない。お前たちが望んだくせに、とも口答えしない。
霊幻は彼らのダッチワイフでいることを選んだ。大事な子供たちを守るために。
「シャワーに連れて行ってくれるか？」
「へいへい、お姫様」
霊幻の足は、エクボたちがかけた呪いによって、ほとんど動かなくなっていた。
もう逃げ出さないように。
もう抵抗できないように。
だから３人は交代で霊幻の世話をやく。それは苦ではなく、むしろ楽しそうだった。
シャワーを浴びさせてもらい、シーツを替えてもらい、霊幻は車椅子に座って、窓からマンションの景色を楽しむ。
相談所に近いこの古いマンションの５階からの眺めは、多少なりとも霊幻の気持ちをすっきりとさせてくれる。

喉の渇きを覚えた霊幻は車椅子を移動させてベッドサイドに置かれたチェストに向かう。
お茶のペットボトルを傾けていると、コンコン、とドアがノックされた。
たぷん、と水平に戻されたお茶が音を立てる。小さくため息をついて、霊幻は「どうぞ」と応えた。
「霊幻さん」
部屋に入ってきた芹沢は、車椅子から霊幻を抱き上げてベッドに移す。
足が動かない霊幻には、抵抗できない。
「……俺、エクボに抱かれたばっかりなんだけど」
乱暴に服を脱ぎ捨てる芹沢を見上げ、霊幻はため息まじりだ。
「ダメですか？」
──拒否権なんて与えるつもり、ないくせに。
せめてと胡散臭い笑みを浮かべて皮肉ると、懐かしい顔に芹沢の興奮を煽ってしまった。
「──所長」
「あ、わざとそういうこという？」
嫌な気持ちになりながらも、霊幻はパジャマのボタンを外していく芹沢の手を拒まない。
霊幻はこのマンションに戻る時に、覚悟していたからだ。──この３人の性奴隷にされるであろうことを。
霊幻の足が動かないのをいいことに、芹沢は好き勝手に霊幻の服を暴いていた。
芹沢は動かない霊幻の足をうっとりと撫でて、ちゅ、と口付ける。
「可愛いなぁ」
機能を失った足を、霊幻の自由と行動力の象徴を、この上なく好ましそうに芹沢は愛撫する。
「ン……」
呪いで動かなくされただけなので、感覚は残っている。くすぐったそうに霊幻はみじろぎした。
「あ、っ」
芹沢の愛撫が内腿に達して、思わず鋭い声が上がる。

その声に芹沢の情欲のスイッチが入った。
「はぁ……」
まだ柔らかい霊幻の蕾にローションを絡めて指を侵入させる。
「ん……ん……」
霊幻は疲れが出やすいメスイキをすまいと腰を逃して芹沢の指を耐えようとするが、骨張った太い指がとうとう弱いところを捉えて、指で挟んでぐにゅんとグミのように弄んだ。
「あっ！ヤダぁ……っ♡」
見つけた弱いところで霊幻をもて遊ぶように、こすったり、弾いたり、甘イキを繰り返して困ったような眼差しになる霊幻を、イかせようと追い詰めたのは成功して。
「あぁ……」
熱い吐息を漏らして、霊幻は精を漏らさずに達した。
「はっ……はぁっ、は……」
息の上がった霊幻の身体が薄い桃色に染まっているのを満足げに見つつ、芹沢は逸物を見せつけるように数回扱く。
「あ……」
巨根の気持ちよさを知っている霊幻の目が期待に潤む。そしてそんな自分を恥じて悔しそうに唇を甘噛みする。芹沢はその姿が堪らなく好きであった。
「はっ……あ、あう、うううっ」
連日の性交三昧のせいでゆるいとエクボに嫌がらせで言われるようになったアナルも、芹沢のモノが侵入する時にはみちみちと押し広げられていく感覚を霊幻にもたらす。犯される、という実感はゾワゾワと総毛立つ被虐的な倒錯を霊幻にもたらして、うっとりさせた。
「ん……っう」
隘路を引き攣るほど押し広げられ、結腸を穿たれた霊幻の性器から、精管を内部から押されたせいでだらりと精液が落ちる。
「トコロテンだ。エロいですね」
「はっ、ぅ……ちが……」
正確には違うのだが、圧迫感で訂正もできない霊幻が悔しそうに顔を歪める。

──ここから正気を保てないほど気持ち良くされるのを知っているからだ。
「ああああっ♡」
ずろろろ、と内部から引き抜かれて。
「ひんっ♡」
ずど、と結腸まで穿たれて情けない悲鳴が漏れる。
「あああ、んっ♡！うああ、あんっ♡！」
穿たれる度に脳が焼き切れそうな快感に涙がこぼれる。霊幻は枕元のシーツを手繰り寄せて思わず噛んだ。
「あぐっ♡あがぁっ♡ああああっ♡ぎぁっ♡」
霊幻の痴態に堪らなくなった芹沢の挿送が速くなる。
「霊幻さん、霊幻さんっ、好きです、もう離さない」
パンパンと下品に腰を打ち付ける音に、これまたぐぽっぐぽっと穴をほじる水音が混じる。
「俺もぉっ♡ああっ♡あんっ♡ああああっ♡」
白い胸腹喉をアーチ状に反らせて快感の大波に耐える霊幻の腰を掴んで、追撃するようにガスガスと穿ち続ける。
「霊幻さんっ……可愛いですっ」
そう囁きながら、締め付けに逆らわず芹沢は霊幻の内部に精をばらまく。
呪いを破り、もはや子宮の無い霊幻の中に、それでもまるで孕まそうとするかのように、芹沢は何度も精液をこすりつける。
ひくひくと甘イキする霊幻を抱きしめて。
「俺には霊幻さんさえいればいい……もう、間違えません」
「……」
霊幻は大事な芹沢との子供のことを思い出しながら、だが何も言わずに抱きしめ返した。

※

「俺、今日はもう３人目なんだけど」
ベッドで『減価償却の抜け穴！』というタイトルの本を読んでいた霊幻が、ノックも無しに入ってきた茂夫にうんざりした顔を見せ

る。
「どうりで色っぽいはずです」
意に介さない茂夫はワザと空気を読まず、ギシリとベッドの上に乗り上げてそっと霊幻から本を取り上げる。
「師匠、交わりましょう」
霊幻が見つめ返した茂夫の瞳は夜空の様な輝きをしていて。
ヒトではあり得ない色に少し哀しくなる。
「ふっ……う」
服を脱いだ茂夫の全身から黒いドロドロを纏った触手が生える。
「師匠、気持ち良くしてあげますね」
長さも太さも自由な触手はじゅろりと霊幻に巻きつき、既に知っている気持ちいい所を責めはじめた。
乳首、背中、骨盤の内側、性器、口の中、足、そして秘蕾。
「ふぐっ……んんっ、んくっ……」
触手はドロリとした黒い甘い液体を霊幻の喉に流し込む。
催淫効果のあるソレは、霊幻の正気をどんどん溶かしていく。
「んあっ……んぶっ、ん、んん！？」
霊幻のアナルに侵入していた触手が結腸を越えて、更に体内に侵入しようとしていた。
「んーっ！んんっ、んんんっ！！」
ぐに、と内臓を犯されて。
ぱたりと霊幻の手が力なくベッドに落ちた。
「んんぐ……」
ポロポロと泣く霊幻をうっとりと見つめる茂夫の額に、もう一つ目がある気がして、霊幻は何度もまばたいた。
何か大事な、茂夫に言わなくてはならないことがある気がするが、霊幻はそれが何だか、媚薬に侵された頭では思い出せなかった。
「んっ……んんっ……」
触手が乳首をぬろぬろと擦る動きや、ゆっくりと体内を犯す動きに、徐々に霊幻の声に甘い音が混ざり始める。
「ん……っ♡」
どぷどぷ、とまた甘いドロドロを飲まされて、霊幻の思考が熱にドロリと解けた。

「そろそろいいかな」
霊幻の口と後口から触手が抜けていく。
「あ……っ♡」
茂夫の怒張を飲み込んで、ビクビクと絶頂して霊幻は精を腹にぶちまけた。
「やんっ……♡あは♡あああんっ♡」
霊幻は何をされても気が狂いそうなくらい気持ちよかった。
だらしない顔を弟子に晒す恥辱にも気がつかないくらい。
「師匠、気持ちいいですね」
「うんっ♡あは♡あはははっ♡」
背を逸らしてイく霊幻に茂夫は目を細める。
愛しくてたまらない、と。
「あは♡あ、は……ああああああっ、あーーーーっ♡♡♡♡」
限界を越えた霊幻がぎゅうぎゅう茂夫を締め付けながら死にそうな快感に呑まれる。
「く……っ」
茂夫もあまりの引き絞りに耐えきれず、精液をナカに勢いよく叩きつけた。
「師匠、気持ち良かったです」
「うんっ♡んっ……抜いてぇ……っ？また、イくからぁ……っ♡」
過ぎた快感から逃げるように霊幻がずり上ろうとするのを、ぐっと茂夫が腰を掴んで止めた。
「あうっ♡！」
「師匠、師匠に僕の眷族を産み付けてもいいですか？」
霊幻の思考が固まる。
「な、何を、言って……」
「そろそろ弟か妹が欲しいと思いません？僕、この間眷族を生み出せるようになったんです」
ごり、と腰を押し付けられて、びく、と霊幻が怯える。
「僕の眷族を師匠の霊気で育てたら、きっといい子が産まれますよ」
「あ……あ……」
震えながら首を振る霊幻ににっこりと茂夫は笑いかける。

「神の子を産むのはいいことですよ、大丈夫大丈夫」
茂夫が挿送を再開しようとした時に。
「おかーさーん！？」
ドンドンドン、と激しく扉を叩かれて、霊幻も茂夫もはっとした。
「今すぐ抜けっ！」
「分かりました！」
親２人は慌ただしく身支度を整えはじめる。
「おかえりー！キッチンにおやつあるぞー！」
すっかり親の顔になって叫ぶ霊幻に、茂夫は舌打ちしたくなる。
舌打ちしたくなって、ちょっと考え込んだ。
「おかあさんと食べるー！！」
その返答に窓を開けて、慌てて２人は換気する。茂夫はシーツを取り替えて、そそくさとランドリールームに向かった。
途中で我が子とすれ違って、納得する。
「ん、どした、シゲオ？珍しく人間らしい顔してるじゃねぇか」
「僕、分かったんだ」
「何が？」
リビングでテレビをつけてくつろいでいたエクボと芹沢が茂夫を見つめる。
「僕、師匠の子供になりたかったんだ、って」
エクボも芹沢もキョトンとする。
「師匠に無条件で愛されて、何よりも優先してもらえて、大事にしてもらえる。僕が求めてた師匠の愛情はコレだったし、師匠はそれを見抜いてたんだと思う」
あー、とエクボが分かったような声を出す。
「そういう愛し方はできない、って霊幻なら拒否するだろうな。変な所で誠実なヤツだからな」
「うん。……もしかしてだけど、僕たちみんな、師匠の子供になりたかったんじゃないかな？」
誰も否定できない。はぁ、とエクボがため息をつく。
「俺様はよ、分かってて霊幻を恋人って立場に置こうとしてたよ。霊幻の言う愛と俺様の愛が決定的に噛み合わないことを分かった上で、アイツを束縛できればそれでヨシとするつもりだった。霊幻本

人が拒否したから無理だったけどな」
一呼吸置く。
「たぶんシゲオの言う事がアタリだろうよ。どこまでも俺たちは幼稚で──それを霊幻に見抜かれてたのさ。『パートナーに足らず』ってな」
「幼稚な愛の何が駄目なの」
芹沢がぼんやりとした声で反論する。
「霊幻さんを好きな気持ちは駄目なことじゃない」
「恋の間はな、それで良いだろうよ。でも生活を共にするなら、そうはいかねぇ。実際、問題が生じてるだろうがよ。芹沢、お前、阿頼耶をいつまでネグレクトするつもりだ？テメェのガキだろうがよ」
芹沢はさっと目を逸らす。
「……っでも、本当に俺の子かどうか……」
「ヤることヤってて！霊幻はお前の子だって言ってて！遺伝子鑑定もせずに手元に置いてるんだろうがよ！！男として責任取れや！！そういうところが幼稚だってことなんだよ！！」
エクボの怒声に芹沢は黙り込む。
「……なら、そんなに俺たちが幼稚なら、子供なんて邪魔なだけじゃないか」
芹沢の言葉に茂夫とエクボがギョッとする。
「霊幻さんを独り占めしようよ」
芹沢の顔が直視できない。
「……自分の子は、可愛いだろうがよ」
「自分の子なら、ね」
エクボは冷や汗を垂らしながら足元を見る。
「芹沢、滅多なことはやめておけよ。霊幻は呪いをかけてる」
「無能力者なのに？」
「誰でもかけられる、唯一の呪いだ。霊幻は自分の命と引き換えに、子供達に呪いをかけた」
芹沢は息を呑んだ。

※

す、と手を組んで目を閉じる霊幻はまるで聖母のようで。
「おかあさん、またあのおまじない？」
動かない足に甘えながら阿頼耶が訊く。
「そうだよ。霊幻茂隆、霊幻永崇、霊幻阿頼耶、どうか３人の身代わりに、霊幻新隆がなれますように」
この世で最も愛する者たちのために、霊幻は毎日祈る。
九州のシェルターが破壊され、色んな人が危険に晒された瞬間に、
霊幻は自分の人生を犠牲にしようと決めた。
そして子供達の幸せだけは守ろう、と。

現に今、子供達はすくすく育ち、幸せに暮らせている。

霊幻新隆は愛する子供達に微笑む。

最悪な毎日でも、それでも俺は幸せだ、と。

完